

敷島の大和心を 人間はば

朝日に匂ふ 山桜花

本居宣長



If I'm asked about yamato-gokoro, the Japanese spirit
I'll answer it's just like the mountain cherry blossom
shining in the rising sun.

かつてこの歌は、戦争にいく人々を鼓舞するために
「戦で桜のように潔く散ることこそ、大和魂である」

という意味で利用されたこともありましたが、しかしそうではなく、
作者の本居宣長が伝えたかったのは、日本人の感受性の豊かさでした。

「大和心」という言葉が日本文学上に初めて登場したのは、赤染衛門という

平安時代の女性の和歌です。また「大和魂」という単語も、彼女の友人である
紫式部の『源氏物語 二十一帖 少女』にて初めて登場しました。

平安時代には、隣国から入ってくる学問や知識こそが出世の必須条件でした。

それに相對する言葉として、生きていく知恵と思慮深さ、感性などを意味するのが
この大和心や大和魂とされています。この二人の女性の文章に書かれていたのが
「お勉強がでなくても、大和心があるのが大事よね。」

「学問があつてこそ、大和魂も生かせると思うの。」

知識や学問も大切だけど、知恵や柔軟な心も必要ではないか。

二人はいつも、友人同士でそんなふうに語り合っていたのでしょうか。

「もし私が『大和心とは何か』と問われたならば、こう答えよう。

それは朝日に照り輝く、山桜の花のように

やわらかく、凛々しき心であると。」

花が咲くこと、花が散りゆくこと。

桜と「大和心」について、あらためて思いを馳せる時

この花がいつも、私たちの歴史と共にあったことを誇らしく思います。
そしてまた来る春に、心からの感謝を込めて。

(本居宣長 「六十一歳自画像賛像」より)

花物語

比田井宗玉

